震災被災地の連携始まる

―― 神戸の壁、野島断層、高野会館 ――

阪神大震災の遺構として残る「神戸の壁」と淡路島の「野島断層」。そして東日本大震災の大津波から多数の人命を守った宮城県南三陸町の「高野会館」。震災の「語り部」活動を軸に被災地の交流が生まれ、阪神の経験が南三陸に引き継がれようとしている。東西の連携と遺構をめぐる物語を描く。

327人の命守った高野会館

保存目指す震災遺構〔南三陸〕

東日本大震災の大津波で多くの死者を出しながら、最後まで防災無線で避難を訴え、「悲劇と追悼の場」となった宮城県の旧南三陸町防災対策庁舎。そこから南西約300㍍の場所に立つのが327人の命を守った「高野会館」だ。震災を語り継ぐもう一つの遺構で、当時何があったのか。

▽予想超える巨大津波

「生きたければ、ここにいなさい！」。会館の営業部長で現場責任者だった佐藤由成（70）は2011年3月11日午後3時前、階段から3階宴会場の出入り口を見下ろしながら声を張り上げた。その日は約250人の高齢者による芸能大会が行われ、地震は閉会のあいさつ中に起きた。

「生きたければ、とどまれ」

帰ろうとするお年寄りたち。だが、3人の従業員が階段の前で腕を組み、立ちはだかった。元漁師でチリ津波も経験した佐藤は同3時20分、3階屋上から広く海底が露出した志津川湾を見て大津波を確信、全員を屋上に上げることを決めた。

同26分、沖合へ約1・6㌔の荒島に津波がぶつかり、島を越す程の水柱が立った。「とてつもない波が来る」。会館に直撃した津波による水しぶきが落下すると、屋上は足首まで浸水した。

会館は3階屋上の約3分の1のスペースに事務所棟がある一部4階建て。佐藤はさらに4階屋上への避難を決めたが、3階と4階の二つの屋上をつなぐ屋外の階段は、入り口にある高さ約1㍍の扉が鎖で厳重に閉められていた。従業員が高齢者を1人ずつ抱えて乗り越えさせたため、行列ができた。水かさを増す津波に緊張が走ったが、潮は間もなく引き始めた。

▽周到な避難準備

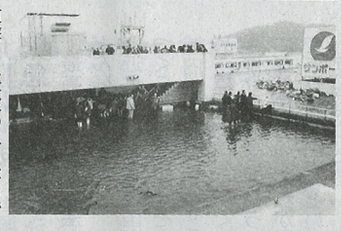
夕方から雪が降りだし、夜は4階事務所棟に約250人、4階屋上にある機械室には体の弱い高齢者や子供を中心に約50人を入れ、従業員や若者は立ったまま、交代で中と外で過ごした。

翌日、佐藤は干潮時刻を午後2時半ごろと想定し、昼からの避難を考えた。干潮だと津波の高さが減殺されるからだ。朝から1人ずつ住所と氏名を紙に書いてもらい、327人が確認された。

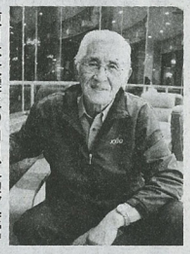
午前9時、従業員らの先遣隊を出し、避難場所の志津川小までのルートや所要時間を確認した。各10人のグループを組み、警察と消防署の職員が先導し、同11時半から移動が始まった。歩けない高齢者約20人は、昼すぎにヘリコプターによる救助が始まった。

午後3時すぎ、全従業員が会館を出た。人命を預かり、守り切った佐藤の張り詰めた24時間が終わった。（敬称略）

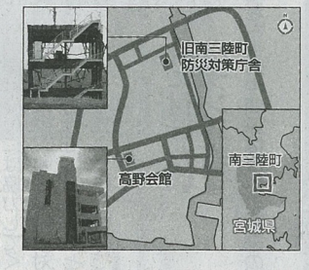
高野会館全景。南三陸町の土木建築会社「高野組」が1987年に結婚式場として建設。佐藤由成氏によると、地中に20㍍前後の杭59本を打ち込む基礎工事を施し、高さは約25㍍。95年に南三陸ホテル観洋を運営する阿部長商店（宮城県気仙沼市）が買い取った（2016年10月、宮城県南三陸町）

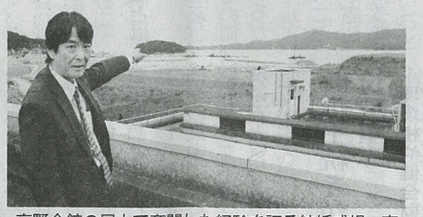


直撃した津波の水しぶきで屋上が足首の高さまで浸水した高野会館3階屋上（2011年3月、宮城県南三陸町、南三陸ホテル観洋提供）



東日本大震災の当日、高野会館の現場責任者として采配を振るった佐藤由成さん（2016年10月、宮城県南三陸町）





高野会館の屋上で奮闘した経験を語る結婚式場・南三陸プラザの佐藤龍也さん。指差している先にあるのが荒島で、震災の時は島を越えるほどの大波が来た（2016年10月、宮城県南三陸町）

語り部シンポ、2月に開催

遺構保存でも東西交流

2月26、27の両日、兵庫県淡路市で「全国被災地語り部シンポジウム」が開かれる。阪神、東日本の各大震災、熊本地震などの語り部たちが活動を紹介し、今後の課題や取り組みを話し合う。昨年3月に宮城県南三陸町で開催されたのに続き2回目で、交流の輪が拡大している。

シンポでは活動の今後の方向性についてパネル討論が行われた後、二つの分科会で各地の語り部と、宮城、神戸、淡路の高校生が具体的な活動について議論する。

東西の連携が始まったのは、大津波の後。「語り部バス」をいち早く運行させた南三陸ホテル観洋の女将（おかみ）、阿部憲子さんが2015年6月、阪神大震災を起こした野島断層を保存する淡路市の北淡震災記念公園を訪れたのがきっかけだ。

同12月には同公園総支配人の宮本肇さん、リメンバー神戸プロジェクト代表の三原泰治さんが南三陸町を訪問。阿部さんが、津波から327人の命を救った、ホテルが管理する「高野会館」の保存方法などを相談した。

宮本、三原両氏は同会館を「後世に力強いメッセージを残す第一級の震災遺構だ」と評価。昨年春には三原氏が保存計画案を作成、提案した。ホテル側は計画を踏まえつつ、同会館内部の整備や助かった人々へのインタビューを記録する活動などを進める考えだ。

第1回「全国被災地語り部シンポジウム」の分科会で活動報告をする淡路市から参加した女子高校生（2016年3月、宮城県南三陸町・南三陸ホテル観洋）

2017年1月4日（水）
【島根日日新聞】